



自動車整備の技術を身に付ける職業訓練。国内避難民の参加も多い

コンサルタンツ株式会社)だ。
「南スーダンが独立したことで、スーダンでは石油の収入が減少し、物価が急上昇しました。主食のパンの価格が倍以上になったりと、生活は苦しくなっています」。

ダルフルでは、住民の6割以上が1日1・25ドル以下で暮らす貧困層だ。一人当たりが1日に使える安全な水は3・4リットルしかなく、食事も国際機関などからの配給に依存している人が多い。妊産婦の死亡率は10万人当たり約500人と日本の約100倍だ。命を支える最低限の条件すらそろっていない。その「不安」が政府への「不満」となり、紛争へとつながっている。

人々が安心して暮らせる環境をつくるために。州政府がより良

い公共サービスを提供できるよう、山本さんを中心に7人の日本人専門家が後押しを続けている。

**公共サービスの充実で
安心をすべての人へ**

活動のフィールドは、ダルフル地域の5州と北コルドファン州など暫定統治3地域。住民への調査でニーズの高かった給水、保健、職業訓練の3分野で、公共サービスの向上を目指している。山本さんはチーフアドバイザーとして日本人専門家や現地スタッフをまとめ、プロジェクトの進捗を確認し、問題があれば解決策を考える役割を担っている。

給水は水公社、保健は保健省、職業訓練は労働省や教育省の職員と事業を進めているが、最大の懸念は治安だ。外国人は、現場になかなか行けないという葛藤がある。山本さんはその中で最大の成果を生み出すべく、現地のコンサルタントを現場に派遣し、3カ月に一度、首都ハルツームに州の職員を集めて情報共有をするなどの工夫をしている。「野球で言えばコーチのような立場ですが、試合を見ることで、結果だけ聞いて指導する難しさを感じています」。日ごろから電話やメールで密接にコミュニケーションをとるように心掛けています。

そこで生きているのが、これま

で南スーダンの首都ジュバやスーダン東部で職業訓練センターの再興などに取り組んできた山本さんの経験だ。「直接目にできないものの、過去の蓄積から、ダルフルの人々の生活はイメージできる。生活の全体像を把握した上で、個々の分野をどう改善していくか考えています」と山本さんは話す。

これまで給水分野では約80カ所の井戸を改修。電気や自動車整備などの職業訓練を通じて約1000人の若者が技術を習得した。彼ら自身の収入向上にもつながっている。さらに保健分野では3500人の助産師が研修を受け、衛生の知識を学ぶことができた。

山本さんが力を入れているのは、200人の州の職員の「やる気」を最大限に引き出しながら事業を進めること。「プロジェクトに数値目標はありますが、それよりも住民たちに本当に喜んでもらえることをやろうと常に話しています。サービスの提供を義務だと考えると疲れてしまう。住民の喜びが職員にとってやりがいになれば、どんどんサービスの質が上がるはず」。



安全なお産に必要な衛生や健康管理の知識を学ぶ助産師たち

各州の省庁から代表者が集まる州調整会議に参加した山本さん。「課題は多いが、あきらめずに解決を考え、実行できる人を育てたい」。左隣はハサナ母子保健課長

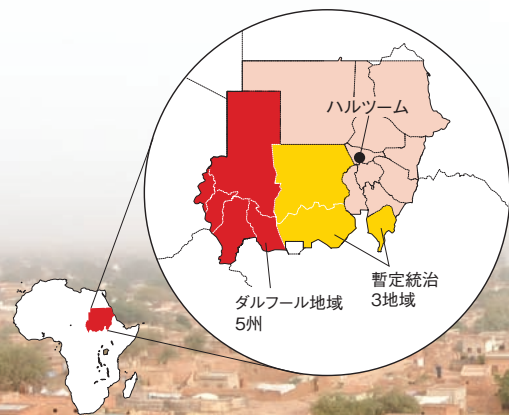


トラックやショベルカー、ポンプなどを供与し、井戸の改修方法を指導

不安から生まれる紛争

「世界最悪の人道危機」と呼ばれたダルフル紛争。2003年にスーダン西部で始まったアラブ系の政府軍や民兵と非アラブ系の反政府組織との戦闘で、約30万人以上が犠牲となり、約200万人の国内避難民を生み出した。06年に和平合意が締結されたものの、現地の情勢は落ち着かない。

そんな中、この国に平和を定着させようと、現地に根差して活動する日本人がいる。06年からスーダン、そして2011年に誕生した南スーダンでの支援に携わってきた山本幸生さん（システム科学



約800万人が暮らすダルフル。公共サービスが行き届いていない

スーダン
from **SUDAN**

平和への第一歩

紛争の根底には、貧困がある一。
いまだ情勢不安に直面するスーダンには、
平和への道筋を切り開くために、
奮闘する日本人専門家がいます。